



小中高等学校の連携を見据えた<伝統的な言語文化>  
に関する指導方法の検討：  
「音読・朗読」の学習活動を基軸にして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 佳文, 谷口, 俊一郎, 吉田, 健太郎, 渡邊, 友恵, Taniguchi, Syunichiro, Yoshida, Kentaro, Watanabe, Tomoe メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/4841">http://hdl.handle.net/10458/4841</a>

## 小中高等学校の連携を見据えた〈伝統的な言語文化〉 に関する指導方法の検討

—「音読・朗読」の学習活動を基軸にして—

中村佳文・谷口俊一郎・吉田健太郎・渡邊友恵

**Teaching “traditional language and culture” based on collaboration  
between primary and secondary schools ;  
- Read-aloud as a central activity-**

**Yoshifumi Nakamura, Syunichiro Taniguchi, Kentaro Yoshida,  
and Tomoe Watanabe**

### 1、研究の目的と問題の所在

本年度より高等学校でも新指導要領が施行され、小中高等学校を通して新たな課程が連鎖的に動き始めた。これはとりわけ「言語活動」を重視し、学習者が主体的に「ことば」を通して課題解決に向けて思考し、学習することの系統化が求められているとも換言できよう。国語科では三領域に加えて一事項として定められたうちの〈伝統的な言語文化〉に関する扱いに於いて、小中高等学校を通じた連携を考えることが、まずは急務な課題であると思われる。なぜなら、小学校5年生で扱われる「古典散文教材」として、(光村図書の教科書を例に述べるならば)『竹取物語』『枕草子』『平家物語』の各冒頭文がある。これらはいずれも中学校では1年生で『竹取物語』、2年生で『枕草子』『平家物語』各冒頭文が採録されており、(編集に系統性があることを考慮して、同じく光村図書の中学校教科書を例にした。)あらためて中学校でも学習する教材となっている。更には高等学校1年生の段階でも、多くの教科書が『竹取物語』冒頭文を採録し、『平家物語』は「武人の最期」を描く章段が中心となりながらも、「祇園精舎」の冒頭部分は確実に採録されている現状がある。要するに現行課程における学習者は、小中高等学校を通して、こうした「古典散文教材」を繰り返し学習することになっている。これは、各段階の教員が連携を見据えた指導を行うことが求められているともいえるだろう。本論考では、学習活動としての「音読・朗読」を基軸にして、こうした要請に応えるべく小中高等学校間の連携を見据えた中学校段階の指導方法に関する基本的な考え方を提起する。同時にそのモデルケースとして、本学附属中学校における共同研究での成果を实践した公開授業における「研究主題」「学習指導案」「公開研究会ワークショップでの意見」の掲載により、指導方法の一形態案とそれに関して議論された多様な意見を示すことで、より具体化した内容を示唆したいと考えている。

## 2、〈伝統的な言語文化〉＝〈古典教材〉を読む「土台」とは何か

平成25年度本学教育文化学部附属中学校公開研究会における研究主題（後に掲載）として、「『読む』土台をつくる国語科学習指導法の工夫」が掲げられている。同時に副題として、「～伝統的な言語文化の領域の特性をいかして～」が添えられる。学習指導要領で唱われている〈読むこと〉の領域のあり方と、〈伝統的な言語文化〉に関する事項の扱い方について、「指導法の工夫」を考案しようとする意図が示されたものである。後に掲載する「国語科研究主題」の「1、主題設定の理由」にも示されているように、「多様な国際化が進行する社会であるからこそ、自国の伝統文化を受け継ぎ、発展させる態度を身につけることが、次代を担う子どもたちには必要である」とされている。「国」という領域を超越した経済的流動性や人的交流の活性化を鑑みて、自国のアイデンティティとは何であるかを的確に把握しておく必要性が求められているといことであろう。ともすると固定化・固着化した概念でのみ捉えられがちな〈伝統的な言語文化〉であるが、こうした国際化社会での要請から逆照射して考えるにあたり、新たな時代に即した創造的な認識を、子どもたちの中に育てていく必要があるということになるだろう。〈伝統的〉という語彙において誤解を招きがちであるが、今まさに求められているのは、新時代の創造的な「古典教育」であると考えたい。

それでは、〈伝統的な言語文化〉＝「古典教材」に関していえば、その〈読む〉ための「土台」とは何であろうか。「土台」という語が示す内容としては、やはり「基礎・基本」があげられよう。〈読む〉ための「基礎・基本」と置き換えた際に、具体的な定義を考えておきたい。まず「基礎」については、文章を〈読む〉ために必要な「言語的知識」とであるとする。語彙・漢字・文章構成・修辭法・文法知識等に代表される「知識」の一定量を、確実に定着させておく必要があるのは言うまでもないであろう。次に「基本」についてであるが、これは「基礎＝言語的知識」を「運用する力」とであるとする。知識のみを学習者が蓄積しても、それを運用できなければ形骸化してしまう。それゆえに文章を読む際に知識を運用できる力なくしては、国語学習の意味そのものが失われるといっても過言ではないだろう。

このような「基礎・基本」の定義を受けて、〈読む〉ための「土台」として最も重要なのが、「意欲」ではないかと考えている。〈読む〉ための「意欲」は、「基礎・基本」の相互習得に潤滑油のような役割を果たし、「言語的知識」の習得や、それが活用できることへの「たのしみ」を提供する根本的な要素である。課題として与えられた教材を〈読む〉という限定的な学習から、自ら読みたいから〈読む〉という、より主体的な学習が求められるのである。これは田近洵一氏<sup>(1)</sup>が主張してきた「学ぶ力の育成」や「自己学習力」といった観点であるが、今後の学習においては、尚一層必要なものであると思われる。より具体的に田近氏の論を〈読み〉に即して示すために、ここで聊かの引用<sup>(2)</sup>をしておくことにしよう。

〈読み〉の学習に意欲を感じるのは、それがたのしいからであり、〈読み〉の学習がたのしいというのは、そこに〈読み〉が成立しているからである。そして〈読み〉の学習は、〈読み〉の成立とともにある。人物の言動の描写を通して、人物の立場や内面への理解を深めたり、作品の展開（プロット）をとらえてその意味を追究し、人間存在への思いを深めたり・・・、そしてその過程で、人物の直面する問題を自分の問題としてとらえ、人間の生き方についていろいろな角度から考えたりする、そのような〈読み〉の行為の成

立が、その学習のたのしさを支えているのである。学習意欲は、そこに生まれる。

(中略)

テキストとしてのことばに好奇心や問題意識を持ち、自分の経験や価値観とかかわらせながら、その意味を解明していく力は、まさに、そのようなテキストのことばとの意欲的ななかかわりの中にある。そこで、そのような〈読み〉のたのしさを体験させること、すなわち、意欲的にテキストとかかわらせることが、〈読み〉の教育を進めていく上での中心的な課題となる。

ここで提唱されている〈読み〉の成立について、本学教育文化学部附属中学校の実態に即して述べておこう。これもまた後に掲載の「国語科研究主題」の中で述べられていることであるが、「古典学習に関する実態調査」についてである。84%の生徒が「古典学習を大切だ。」とはしながらも、「難しいとか面白くない」と感じる生徒が60%いるという結果がある。(詳細なアンケート結果は、後の公開研究会「研究主題」に譲るが)これでは特に〈伝統的な言語文化〉に関する学習において、主体的で意欲的な〈読み〉が成立しているとは言い難い現状である。

また、2013年12月に文部科学省から発表されたPISA学力調査の結果を見ても、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の三分野における「学力」という面では、10年前に比較して大きく改善されたことは顕著であるといつてよいだろう。だが、「数学的リテラシー」に関する調査であるが、「興味・関心や楽しみ」といった指標においては、OECD平均を大きく下回り大変低調であるという結果が読み取れる。「読解力」についても同様に考えてよいかは慎重であるべきだが、2003年のいわゆる「PISAショック」以降の日本での取り組みにおいて、「力」という点では、一定の成果を上げたといえるだろう。だが、学習そのものを子どもたちが本当に主体的・意欲的に行っているかという点においては、未だ問題が多いと言わざるを得ない一結果である。

こうした意味でも、特に〈伝統的な言語文化〉＝「古典教育」という面では、より教室に〈読み〉を成立させる「意欲」が求められると思われる。以下、その〈読み〉を成立させる「意欲」について具体的な方策について詳述していきたいと思う。

### 3、「音読」から「朗読」へ昇華するための「意欲」

ここでは「音読」「朗読」という学習活動に関して〈読むこと〉に関連させて、その「意欲」について論じることにしよう。この観点を扱う理由を最初に二点述べておきたい。1の項目で触れたように、小学校教科書にも古典教材や文語文教材が採録されている。その学習方法を概観してみると、多くの場合が「音読」を中心とする学習活動になっている現状がある。特に小学校5年生で扱われる古典散文教材においては、まさに意味内容には深入りをせず、その文章が持つ韻律性を声で味わうことが学習の中心となる。その延長上で、「音読」から「暗誦」を課題とする場合も多い。古典原文の持つ韻律性を声で味わうことを繰り返し、身体的に日本語のリズムを享受していく学習がなされるわけである。学習者が古典原文と最初に出会うのは、「音声」を媒介としたところからなのである。この「音読」という方法は、何も小学校のみで行われるわけではない。中学校・高等学校においても古典学習においては「音読」の学習活動がなされる。それでは小中高等学校で、その「音読」という学習活動の質は、どのように変化する

のであろうか。まず第一点目として、こうした学習活動上の通底こそ大きな課題であると考えたことが、ここで取り上げる理由である。

二点目は、「意欲」面についてである。「音読」をする「意欲」という意味においては、概して小学生は旺盛な〈読む〉「意欲」をもっているものである。成績評価の問題を抜きにして、多くの子どもたちが素直に「たのしめる」学習活動であるからであろう。それゆえに小学校段階の〈伝統的な言語文化〉に関する教材を扱う学習は、それほど学習者に嫌悪感を抱かせるものではないはずである。「暗誦」が課題となっていたとしても、相互に声にすることを楽しみながら、繰り返しているうちに、自然と習得されてしまう場合が多い。しかし、この「音読」への「意欲」は、中学校・高等学校へと進むにつれて、確実に減退するといつてよい。特に高等学校になると、学習活動そのものが解釈・現代語訳を目的とした文法学習に偏向し、「音読」という学習活動が甚だ疎かにされ形骸化してしまっていることも稀ではない。この「音読」の「意欲」に減退傾向が見え始めるのが、まさに中学校である。それゆえに、中学校段階で「音読意欲」をどれだけ維持し、むしろ活性化するための方略が求められるのである。

中学校段階の「音読意欲」維持の方略を考える前提として、小学校と高等学校の「音読」による学習活動の問題点を先に考えておきたい。まずは小学校における古典教材の「音読」についてであるが、その大きな問題は、「声」と「(教材)内容」の不一致という点であろう。繰り返し言及している小学校5年生古典教材の『竹取物語』『枕草子』『平家物語』を例に述べるならば、作品内容や文体の特徴が大きく違うにもかかわらず、共通したある種の「呼吸」を持った「音読」で、いわば“強引に”読まれてしまうということである。『竹取物語』には、平安朝前期の「昔物語」として、その「伝奇性」という点で不思議な味わいがあるはずである。『枕草子』には、中宮定子に仕える清少納言が宮中での生活に根ざした感性から得られた、新たな季節美を表現した繊細な味わいがあるはずだ。また『平家物語』の冒頭文である「祇園精舎」の部分には、この物語によって滅亡した平家の武人たちを鎮魂するという無常観が表出しているはずである。これを一様なリズムと読み方・呼吸で「音読」するのは、聊か無配慮に過ぎると感じざるを得ない。小学校での学習者においては、このような「味わい」までは理解できない段階であるのは確かであろう。それならば、せめて指導者は、その古典本文の背景を理解した上での「音読」を教室で提示できる、教員としての「読む土台」を獲得しておくべきではないか。

次に高等学校での学習活動で陥りがちな問題点を指摘しておこう。前述したように、高等学校では、解釈・現代語訳ができるようにするために語彙・文法学習に偏重する傾向が否めない。文章細部の品詞分解に深入りし、文章を「読む」ためなのか、精密な「文法全解」が目的なのか曖昧なほどである状況も散見される。したがって「音読」とはいつても、作品と出会う導入時に、未だ学習者の解釈がまったく成されていない段階で行われることが多い。そのために、学習者の「音読」は、語彙・意味を反映しない無配慮なものとなる場合が多く、授業の学習活動として意味をもたないことすらあるだろう。こうした授業内学習活動が繰り返されると、次第に頹廢的ともいえる「音読」が教室で日常化してしまう。その上、「解釈」を踏まえてこそ目的ある意義深い「音読・朗読」になる視点が、指導者にも欠如しているため、なかなか有効な方法で、古典教材を「声」で享受する方法を見いだせない現状がある。

こうした小学校と高等学校の間となる中学校の「音読」学習活動の方法を的確なものとして検討することこそ、小中高等学校の連携を見据え、その問題点を改善するために重要な位置にあると考えられる。ここであらためて中学校学習指導要領の〈伝統的な言語文化〉に関する事

項において、「音読・朗読」に関連した項目を見直しておくことにする。

(中学校1年生)

(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

(中学校2年生)

(ア) 作品の特徴を活かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。

(中学校3年生)

(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

学年ごとのこうした項目を見るに、1年生は「音読」によって「古典の世界に触れる」とあり、2年生では、「特徴を活かして朗読」し、「古典の世界に親しみ」とあり、3年生では、「注意して読み」、「その世界に親むこと」とある。学習指導要領に従うならば、1年生の段階では「音読」であった学習方法が、2年生で「朗読」に変化するというわけである。そして中学校3年間で、次第に「触れる」から「親しみ」に変わり、「作品の特徴」や「歴史的背景」に注意した「読み」を築いていく必要があることになる。いわば中学校というのは、「音読」から「朗読」への移行期であることを学習指導要領は示しているといえよう。

それでは、「音読」から「朗読」へと移行するためには何が必要となるのだろうか。そこには内容を解釈し理解を進めることによって、その古典本文の特徴を「声」で表現する際に活かしていくという点が不可欠となる。「音読」という場合には、小学校での古典教材の扱い方に見られるように、身体的に本文の韻律性を享受するという方法もある。また内容を自らが理解するために「声」に出して読むという段階もある。更には一定の内容解釈に基づいて、文章全体への理解を求めて声にする場合もあるだろう。ひとえに「音読」といっても、その段階的方法の範疇というものは、たいそう広いということになる。こうした「音読」活動の充実を受けて、次第に本文の特徴を活かして他者に対して表現する「朗読」へと昇華していくことになる。中学校2年生以上では、もちろん段階的に「音読」という方法を用いながらも、最終的には「朗読」の域に達するような「声」を、〈教室〉で実現する必要性が求められているということである。

中学校段階でこのように「音読」から「朗読」へ移行していくことを配慮するにあたり、やはり学習者の「意欲」が問題になるだろう。その「意欲」を支えるものが、古典本文を「読む」ことにより様々な発見があり、自分自身の「想像力」を掻き立てる刺激を、古典教材の中に見出すことにあるのではないだろうか。「音読」から「朗読」へとという昇華のために必要なのは、古典本文を主体的に「読む」ことであり、その「読み」を成立させることで、古典教材を「たのしい」と感じる学習者の「意欲」が醸成されるものであると考えられる。

#### 4、古典原文をどう扱うか

小中高等学校の古典学習の連携を考えるにあたり、もう一つ重要な観点は、「古典原文をどう扱うか」ということである。小中高等学校のどの段階においても基本的には、「古典教育は、原文で行うことが原則」<sup>(3)</sup>となるだろう。先に述べた小学校5年生での古典散文教材でも、や

やはり「原文」を意味内容には深入りせずに「音読」する学習活動が中心であった。やはりこの「原則」が生きているといえる。だが、中学校教科書を概観すると、適宜現代語訳を併用し採録しているものや、現代語による物語梗概や解説が付されているものが珍しくない。内容解釈に学習者を導く段階では、現代語訳のみならず現代語で解説的にリライトした文章を教材として“利用”することも有効ではないかと考えられる。ここでは「原文で行うことが原則」を尊重しながらも、柔軟に現代語訳や解説をも教材として使用する意義を考えることによって、小中高等学校の連携を具体化するとともに、「古典に親しむ」学習活動の可能性を見定めていきたい。ここではより実践的に上記の命題に答えるために、後に掲載する本学附属中学校公開授業の指導案に関連して、論を進めて行くことにする。

後に掲載の公開授業学習指導案では、授業の導入で「原文の音読」をしないという構成となっている。通常の古典教材を扱う授業としては、実に“特異”な印象を受ける向きも多いと思われる。それは多くの古典授業が、授業の冒頭で教材の「原文」を「音読」をして、作品と学習者を出会わせるという構成であるはずだからである。提案を旨とする公開授業であるからこそその趣旨という面もあることも踏まえた上で、この理由を二点指摘し、特に小中学校の〈伝統的な言語文化〉における授業の連携についての視点を提供したい。

まず、この公開授業で「古典原文」を「音読」しない理由は次の二点であると考えられる。

- (1) 小学校段階で多くの子どもたちが暗誦までできる。
- (2) 「読む」ための「意欲」を刺激してから、思考の伴う「音読」をするため。

もちろん、上記二点の理由にも地域や学校間での差があることは否めない。(1)の理由においても、小学校5年生段階では暗誦ができるようになっていても、中学校1年生まで保存されているかは、個人差があるはずだ。「暗誦」が課題として示され、小学校の授業で確認がなされても、それが「身体化・技化」<sup>(4)</sup>するレベルに至らない場合も少なくはないだろう。このように考えると、むしろ小学校段階では、「音読」することに「たのしさ」を見出し、何度も繰り返し声に出して読むことで、中学校学習内容の“種を播く”という発想で、「声＝音声」として身体化しておくことが求められているということだ。「声に出してたのしい」という姿勢で、古典に親しませることが、小学校段階の〈伝統的な言語文化〉に対する「読み」ということになるだろう。

また(2)の理由を挙げたのは、これまでの古典教材を扱う授業が、あまりにも無配慮に教材の「音読」を実施してきた反省からである。音声によって「原文を読めない」ということを最重要克服課題として捉えるあまり、古典教材の授業での「音読」は、学習者にとってたのしくないものになってしまいがちである。小学校段階では、歴史的仮名遣いへの意識を持たせることは困難であろうから、補助的な「ふりがな」や指導者の範読に合わせて、ともかく「声」を模倣することから始めるということになるだろう。中学校段階となれば「仮名遣い」と発音との相違に自覚的になり始めるので、その好奇心を出発点に考えさせる学習を施してもよいだろう。「なぜ仮名表記と発音が違うのか？」という課題を解決するという方向で、「音読」を位置づけておくことが望まれるのではないだろうか。そして高等学校段階になったときに、中学校で養った問題意識を、より深めるために文法を学び、国語学的な見地から「歴史的仮名遣い」を学ぼうとする「意欲」をもった学習者となるように連携を施すことが理想とであると考える。

よって、この公開授業での「音読」は、物語内容を「読む」ための「意欲」を刺激してから、思考を伴った（問題意識をもった）「音読」をするという学習過程となっているということである。

学習指導案を更に具体的に指摘するならば、「学習指導過程」の「8」として、「チェックした現代語訳に対応する古文の言葉や部分について意識しながら、古文の音読の仕方を考える。」という「学習内容及び活動」がある。その「意識」とは、「古文音読の区切る場所」「強調する語句の選定」という二点が提示されている。これは「6、板書計画」にも示されたように、「リズムを味わうだけの「音読」ではない、物語の内容をおさえた中学生としての音読」とされている。ここに中学校1年生が〈伝統的な言語文化〉＝「古典教材」を学ぶ際に、「音読」という学習活動を通して、どのように小学生との差違を明確にするかということへの、大変重要な実践的提案を見出すことができるだろう。身体的な「声」として学習していた小学校段階を超えて、「意味内容を考え、興味関心を抱いた」点を基にしながらか、「音読」のあり方を主体的に考えるという学習。それこそが、自律した古典教材の「読み」を育む学習活動といえるのではないだろうか。

今後求められていく古典学習とは、課題発見型を中心とする自律した「読み」を成立させたものであるといえよう。「原文で読むことが原則」ではあるが、適宜現代語訳や現代語解説文などを援用し、学習者が古典教材の内容面に疑問を持つことに端を発し、「興味関心」を拡大していく学習活動が必要である。そこに学習者が「たのしさ」を見出してこそはじめて、古典教材の「読み」が成立するといえるのではないだろうか。従来型の古典学習では、「解釈」する活動のみに偏向し、こうした内容への「興味関心」が置き去りにされがちであった。よって「自律した読み」が成立せず、「音読」という学習活動一つをとってみても、無味乾燥なものとなり、むしろ「古典嫌い」を助長していることも多かった。「解釈」する活動に偏向していた原因として、指導者の独善的な専門志向が作用していたことも指摘できよう。古典教育の目的は専門家養成にあらず、である。大村はまは、「古典に親しむ学習活動」<sup>(5)</sup>の中で「発問は、専門的な程度の高いものを避けて、原文を読みほぐす役割に位置づける」と提案している。更には発問のみならず、「原文をよみほぐす」ための疑問や興味関心が、学習者の内部から発せられることが、古典教材の「読み」を成立させていくのである。

## 5、まとめ～〈伝統的な言語文化〉とは？

以上、「音読・朗読」を基軸にしながらか、小中高等学校における〈伝統的な言語文化〉の連携を見据えた扱い方について述べてきた。最後にまとめとして、〈伝統的な言語文化〉とはどのようなものであるか？ということについての考え方を示しておきたい。教材対象として、それが古典となれば、先入観として固定されたもの、「伝統」として動かないもの、という観念が先走る傾向にあるように思われる。だがしかし、古典教材を本来的に「読む」ということは、読者の生きる環境に応じた、新たな意味づけをそこに見出すということではないだろうか。そのためにも、「〈伝統的な言語文化〉とはどのようなものであるか？」という問いを、指導者も自ら持ち、学習者との対話を通じて、現代に古典が生きる意味づけを創造して行く学習が求められると考えたい。その手立てとして、身体的な「音読」から思考を伴った「朗読」を目指して、古典教材の内容への興味関心から、意欲を育む課題解決型の方法が求められているのではない



だろうか。古典の意義を確かめ合う、自律した「読み」の土台を育み、創造的な意味づけを学習者が発見できる授業を志向していくべきであろう。

#### 注・文献

- (1) 田近洵一氏『現代国語教育への視角』（教育出版・1982年）
- (2) 田近洵一氏『国語教育の方法 ことばの「学び」の成立』（国土社・1997年）
- (3) 『大村はま国語教室3 古典に親しませる学習指導』（筑摩書房・1991年）
- (4) 齋藤孝氏『声に出して読みたい日本語』（草思社・2001年）
- (5) (3) 前掲書。

#### 6、本学附属中学校との共同研究成果

以下、本学と附属中学校との共同研究により実施された公開研究会の成果である。当日公開された授業の理論的根拠を、中村執筆の小論が担う形式となる。現場にある指導者としての視点から得られた「研究主題」「学習指導案」、そして公開研究会当日に参加者とともに実施した「ワークショップでの意見交換のまとめ」である。前記小論と併せて参照いただき、理論と実践における相互理解の材料としていただきたい。なお、執筆分担は、「研究主題」が吉田健太郎、「公開研究会学習指導案」が谷口俊一郎、「ワークショップでの意見交換のまとめ」が渡邊友恵である。

平成25年度 宮崎大学教育文化学部附属中学校公開研究会資料

【平成25年度 国語科研究主題】

## 『読む』土台をつくる国語科学習指導法の工夫

～伝統的な言語文化の領域の特性をいかして～

### 1 主題設定の理由

現代社会は、急激な変化の中にあり、今後ますます国際化が進むことが予想されている。そして、これからの国際社会を担う子どもたちは、他国の文化や歴史を尊重し、理解するとともに自国の文化・伝統をしつかりと受け継ぎ、発展させていこうとする態度を身に付けることが必要とされている。

学習指導要領には、「[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]」が設けられている。これにより、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧・漢詩・漢文などの古典や神話・伝承、近代以降の文語調の文章に小学校から触れることになった。これらの学習を通して、我が国の文化・伝統に触れることは、子どもたちが確かな国際感覚をもつためにも極めて重要なことである。

教科書についても改訂があり、学習内容としては「音読、暗唱を中心に文語のリズムや調べを楽しむ小学校段階での学習」、「朗読、音読に加えて仮名遣いの違い、古語の意味、傍注・現代語訳を添えての古典の読みを学ぶ中学校段階での学習」、「仮名遣いの理解、文法事項の理解、文学史的理解、読解、品詞分解などを軸として、より深い読みを学ぶ高等学校段階での学習」というように、学校種ごとに違いがある。また、竹取物語前文・枕草子序段・平家物語冒頭といった教材は、小・中・高の全ての学

校種で取り扱われているが、同じ教材を扱うという点からも、各学校種で何をどのように学ぶのがより大切となる。

古典教材を扱う学習がどの学年段階にも入っていること、同じ教材を各段階で取り扱うこと、小学校で音読、高等学校では読解を中心とした学習活動を行うことから、中学校はその橋渡しという役割を担うこととなる。そこで、中学校においては「古典を読み親しむ」ことを入口としながら、『読む』土台をつくる指導の工夫及び授業を行うことが必要ではないかと考えた。

そこで、本校生徒の実態を把握するために、古典学習に関する実態調査を行った。

④ 古典の授業は好きですか。

1	2	3	4
---	---	---	---

⑤ 古典の授業は大切だと思いますか。

1	2	3	4
---	---	---	---

⑥ 古典を学習するときに難しいとか面白くないと感じることがありますか。

1	2	3	4
---	---	---	---

1、2と答えた人は、その理由を教えてください。

⑦ 教科書以外の古典の作品を読んでみたいと思いますか。

1	2	3	4
---	---	---	---

⑧ 古典の授業でどんなことを学んでみたいですか。(いくつ選んでもいいです。)

- 1 昔の人の生活や考え方
- 2 歴史的仮名遣いや朗読
- 3 話の背景の理解
- 4 音読・朗読・暗唱
- 5 昔の言葉の意味

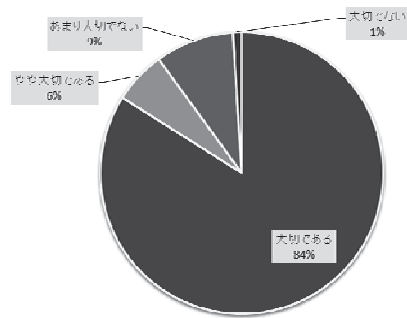
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

### 国語科のアンケートより抜粋

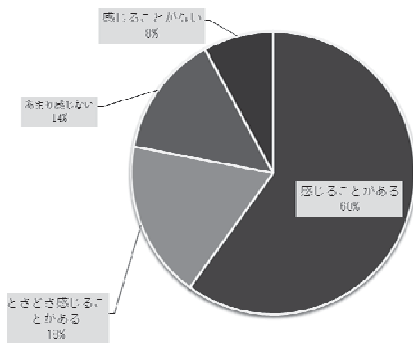
その結果によると、「古典を学習することは大切だと思いますか」という質問に対して、84%の生徒が「大切である」と答えた。しかし、「古典を学習するときに難しいとか面白くないと感じることがありますか」と

いう質問に対しては、60%の生徒が「そう感じることもある」と答えた。その理由として、そのうちの7割近くの生徒が「そのときの様子や場面が分からない」と回答している。

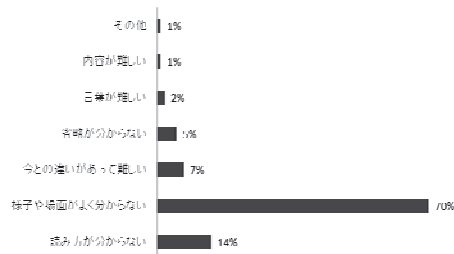
#### 古典を学習することは大切だと思いますか。



#### 古典を学習するときに難しいことや おもしろくないと感じることがありますか。



#### 古典を学習するときに難しいことや面白くないと感じる理由を挙げてください。



これらのことから、言葉や場面について考える機会を十分に与えることで、古典は難しいという意識を軽減させることができるのではないかと考えた。さらに、古典作品をもっと読んでみたいという意欲を喚起することで、それが読む力を身に付けることにつながるのではないかと考え本主題を設定した。

#### 【 研究の仮説 】

音読活動を適宜取り入れながら、言葉や場面について考える機会を十分に与えれば、古典作品を身近なものとしてとらえて、様子を具体的に想起しながら読み味わうことができるようになるであろう。

#### 【 研究の計画 】

月日	会議	概要
4月	教科研	今年度の取組について
5月	教科研	主題・仮説の検討 アンケート作成・実施・分析 研修授業Ⅰ
6月	教科研	授業実践について
7月	教科研	研修授業Ⅱ 授業実践について
8月	教科研	今後の研究の確認
9月	教科研	公開授業の指導案検討
10月	教科研	プレゼンテーション提案
11月	教科研	プレゼンテーション確認
12月	教科研	公開授業の指導案確認
1月	教科研	本年度の研究の成果と課題
2月	教科研	来年度の研究に向けて

このような日程で、言葉や場面について考える授業実践を行った。

### 第1学年 国語科学習指導案

平成25年12月12日 5校時

1年B級(男子20名、女子19名)

授業提案者 教諭 谷口 俊一郎

#### 1 単元名 いにしへの心にふれる 蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から―

#### 2 目標

- 物語としてのおもしろさを味わうことを通して、古典文学の世界に親しむ態度を育成する。
- 現代語訳や脚注などを参考に、場面を想像したり表現を読み味わったりすることを通して、物語の展開や内容をつかむ力を育てる。
- 物語のあらすじを理解し、歴史的仮名遣いに注意しながら音読することを通して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れることができるようにする。

#### 3 指導観

- 本単元は、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「ア 伝統的な言語文化に関する事項」「(7) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。」「(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。」を受けて設定されている。『竹取物語』は、「かぐや姫のお話」として絵本でもよく取り上げられているなじみのある作品であり、小学校学習指導要領〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「ア 伝統的な言語文化に関する事項」「(7) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」を受け、5年生の教科書にも掲載されている。

『源氏物語』の中で「物語の出で来はじめの祖」と記されている『竹取物語』からは、当時の人々の様々な憧れや想い、社会的情勢などを読み取ることができる。「月」や宇宙といったものへの憧れ、海の向こうにあるもの、不老不死への願いなどが生き生きと語られており、現代の私たちに共通する部分が多いと思われる。また、「富士山」の地名の起源や当時の様子を垣間見られるような表現もあり、趣向を凝らした「物語」として、現代でも十分に楽しむことのできる作品であるといえる。その中でも本教材は、翁が竹の中から女の子（後のかぐや姫）を得る物語の冒頭部分と、貴公子の中の一人、くらのちの皇子の冒険談、そして、かぐや姫昇天後の帝の行動を描いた物語の最後の場面を載せている。これは、光る竹から子どもを授かるという実際にはあり得ない物語世界、続いて求婚者達が財力や策略をもって美しい女性を妻にしたいという人間の欲望が描かれた場面、最後に再び不老不死の薬や天界へ帰って行くという摩訶不思議な伝奇的世界、という竹取物語の特徴的な構成とも合致している。「かぐや姫」のお話として物語の内容を断片的にしか知らなかった生徒たちも、本教材の学習を通して、およその全体像をつかむことができると考えられる。

「物語」という声に出して読み進めるべき作品、幼いころから「昔話の絵本」としてなじみのある生徒が多い本教材は、伝統的な言語文化の継承や古典に親しむという態度を育成していくことに適した教材であるといえる。

- 本学級の生徒は、小学校5・6年生で易しい文語調の文章について学習しており、音読や暗唱に取り組んだ生徒も多い。中学校に入ってから、古典学習の基礎として「いろは歌」や「七夕に思う」といった単元について学習してきた。その結果、歴史的仮名遣いが使われている文章であっても、耳になじんだような著名な作品であればそれほど抵抗感なく取り組むことができる。しかし、書かれている情景や内容にまで思いを馳せたり、古典文学の世界を楽しんだりすることまでは至っていない。

古典学習に関するアンケートによると、「古典を学習することは大切だと思いますか」という質問に対して、39名中35名(90%)が大切だと考えていることが分かった(とても大切だと思う27名、大切だと思う8名)。さらに、「古典について学習するとき、どんなことに取り組んでみたいですか」という質問では、「すらすら読めるようになりたい」「昔の言葉を理解し、話の内容を理解したい」という意見が多かった。また、「古典を学習するときに難しいとか面白くないと感じることがありますか」という質問に対しては、39名中27名(69%)が「そう感じる時がある」と答えている。その理由として、「言葉の意味が分かりにくいから(27名中22名・81%)」「読み方が難しいから(27名中20名・74%)」が挙げられていた。しかし、小学校で学習した古典学習について楽しかったことを尋ねてみると、「暗唱ができるようになったとき」と答える生徒が多かった。従って、「難しいけれど、読めるようになったり暗唱できるようになったりしたときには、達成感を味わう」ことができるということが分かった。最後に、「教科書に載っている古典以外の作品を読んでみたいと思いますか」という質問に対して、39名中13名(33%)しか「読んでみたい」と回答しなかった。古典学習は大切だと感じている生徒が多いものの、「古典文学とは難解なもの」というイメージがあり、「古文を暗唱できるまで繰り返し読む」という活動と「古文を現代語訳する」という活動が古典学習であるように感じている生徒が多いのではないかと考えた。

- 本教材においては、小学校における古典の学習を踏まえ、「系統性のある古典学習」を進めていく。つまり、小学校における「音読」で身に付けた「音の響き」を楽しむことに重ねて、「ことばの意味や物語の背景」を加えた中学校の「音読」である。

そこで、本単元の学習にあたっては、小学校における音読との違いを意識し、現代語訳からつかんだ「物語」としての面白さを、古文の音読に反映していく学習を展開していく。さらに古典における現代語訳を確実に読み取ることが古典文学の理解だと考えた授業を展開していきたい。

第1時では、現代語訳や現代文を活用した授業を展開する。さらに、言葉にこだわることで、現代語訳に描かれている場面をイメージしやすくさせ、古典文学の読み取りに対する苦手意識や抵抗感を軽減させていく。生徒になじみのある「かぐや姫のお話」を学習することを伝え、実際にはあり得ない「光る竹」「三寸ほどの子ども」「急激な成長」などの設定に注目させ、「かぐや姫のお話」が、実は奇想天外なSF小説であるという面白さへの発見へとつなげさせていきたい。第2時では、現代語訳をもとに考えた古文音読を発表する、さらに、現実世界における求婚譚の場面において、かぐや姫が示した難題に挑んだ4人の貴公子について考えさせていく。知恵や富の力で自分の思い通りにしたいと考えた4人の貴公子の結末を読み物資料を活用しながら整理させていく。第3時で

は、くらのちの皇子の架空の冒険談について考えるようにする。かぐや姫が納得せざるを得ないような話であった理由はどこにあるのか、そこを考えさせうえて古文の読みに反映させていく。第4時では、5人の求婚者の失敗、帝の申し入れにも応じないかぐや姫の思い、そして天人の登場という不思議な世界を楽しむようにする。かぐや姫に課されている悲しい宿命について理解し、現実世界では最も権力をもつ帝でさえも「天人」の前では無力であったことから、当時の人々の持つ「世界観」について思いをはせることができるようにする。第5時では、かぐや姫を慕う帝の思いに焦点をあてていく。「富士山」の地名起源説も登場するこの場面は、当時の富士山の状況に気付くこともでき、その発見をもとにした古文の読みを考えさせることが可能となる。第6時では、歴史的仮名遣いなど基本的な文語のきまりを学び、古典の世界を味わうような音読を進めていくようにする。表現に沿って登場人物の心情を考えたこれまでの学習を踏まえ、古人との心のふれあいにつなげるような「ことば」にこだわった音読に取り組ませ、内容をとらえることで分かる喜びを味わわせたい。

音読を繰り返すことでリズムを味わわせるだけでなく、美しいものや不老不死への憧れ、人間の欲望など、古人と現代人との共通点や相違点を発見させることで、古人を身近に感じさせていく。現在伝わっている昔話は、古典が姿を変えながら現代に生きているものである。そして、「他の古典作品はどうだろう」「他の古典作品を読みたい」という意欲の喚起につなげたい。

#### 4 単元の指導計画————全6時間

- (1) 現代語訳や現代文の読みを通して、冒頭の場面を理解する。……………1時間 (本時)
- (2) 音読を発表したあと、課題に挑んだ貴公子達の結末を整理する。……………1時間
- (3) 現代語訳を通して、くらのちの皇子の策略を考える。……………1時間
- (4) かぐや姫の不思議な世界から、当時の人々の世界観を知る。……………1時間
- (5) 古典から読み取れる歴史的事実や事例について考える。……………1時間
- (6) 文語のきまりを理解し、内容や語句にふさわしい音読を行う。……………1時間

#### 5 本時の学習指導

- (1) 目標
  - 描写や表現に留意しながら現代語訳を読み進め、把握した物語の設定やあらすじについて意見を交流することで、音読にいかすことができる。
- (2) 資料及び準備
  - 板書用掲示物      ○現代語プリント      ○古文プリント      ○付箋紙

## (3) 学習指導過程

過程	学習内容及び活動	教師の支援	備考
導入	<p>1 「かぐや姫のお話」について、知っていることや聞いたことがある内容などについて自由に発表し合う。</p> <p>2 本時の学習目標を把握する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>○ 現代語訳をもとに、竹取物語の世界をイメージしよう。</p> </div>	<p>○ 積極的な意見の交流をはかるために、古典文学としてではなく、「昔話」として読んだり、聞いたりした、「かぐや姫」について自由に語る場を設定する。</p> <p>○ 本時の学習課題を意識するために提示し、全員で声に出して読む場を設定する。</p>	<p>掲示物</p>
展開	<p>3 冒頭の現代語訳と現代文の一部を自由に音読する。</p> <p>4 現代語プリントに書かれている内容についての不思議を探すために、教師から示された例について考える。</p> <p>○ 子どもを授かったと喜んだ翁</p> <p>5 興味をひかれた部分に線を引きながら、プリントを黙読する。</p> <p>○ 根元の光る竹 ○ 三寸ほどの人</p> <p>6 線を引いた部分を発表し合い、自分なりの解釈を付箋紙に書き込む。</p> <p>7 意見を交流し、竹取物語の世界について想像を広げていく。</p> <p>○ 光っていたのは、「根元」なのか「筒」なのか「三寸ほどの人」なのか。</p> <p>○ 発見されたときの体の大きさや成長の具合から想像できること。</p>	<p>○ 物語として読む意識をもたせるために、冒頭場面の現代語プリントを配付する。</p> <p>○ 関心を高めるために、具体例とあわせて適宜補助的な発問を投げかける。</p> <p>○ 正解を探すのではなく、自分なりの解釈をもつことを重要視するように指示を出す。</p> <p>○ 物語の場面設定や状況把握をすすめるために、文だけではなく、部分や言葉を抑えながら読み進めるように指示を出す。</p> <p>○ 自由な発想を促すために、短い言葉で書いても良いことを告げる。</p> <p>○ 班で出された意見について整理するために、現代語拡大プリントにまとめていく場を設定する。</p> <p>○ 物語の冒頭の場面をつかむために、整理された意見に対するそれぞれの考えを伝え合う場を設定する。</p>	<p>現代語プリント</p> <p>付箋紙</p> <p>現代語拡大プリント</p>

	8 現代語訳に対応する古文の言葉や部分について意識をしながら、古文を音読の仕方を考える。 ○ 古文音読の区切る場所 ○ 強調する語句の選定	○ 物語の内容に即した音読のあり方を模索していくために、古文プリントに整理していく場を設定する。	古文プリント
まとめ	9 本時のまとめとして、班ごとに話し合った事柄を意識した音読練習を行う。  10 次時の授業の展開を聞く。 ○ 各班の考えを学級全体に示したうえで実際に発表する。 ○ 美しく成長したかぐや姫に求婚する貴公子達の登場とかぐや姫の対応について考えていく。	○ 班での共同学習の成果を実感するために、イメージに近づくまで自由に修正を繰り返すよう指示を出す。  ○ 物語の構成を意識させるために、現実世界の場面が変わることを伝える。 ○ 古典文学への関心を高めるために、昔話などの形で、現代でも楽しまれていることを理解する場を設定する。	

(4) 本時の評価規準

評価規準	評価方法
○ 描写や表現に留意して現代語訳を読み進め、物語の設定やあらすじについて意見を交流し、音読にいかすことができる。	○ 観察 ○ ワークシート

6 板書計画

古典は現在でも楽しまっている	・リズムを味わうだけの「音読」ではない 物語の内容をおさえた中学生としての音読	内容を考えた古文音読の工夫を考えよう	○ 拡大古文 ) ○ 根元の光る竹 ○ 三寸ほどの人	○ 子どもを授かったと喜んだ翁	現代語の文章で気になる言葉や部分を探し出そう	現代語訳をもとに、 竹取物語の世界をイメージしよう。	学習目標 ・「かぐや姫」 ・竹から生まれた(小さい) ・月に帰る ・蓬莱の玉の枝―「竹取物語」から
----------------	--	--------------------	-------------------------------	-----------------	------------------------	-------------------------------	--



## 研究公開 国語科授業研究会ワークショップ（2013年12月12日）

### グループA

- 現代語訳に注目することで、読み飛ばしたり、いつもなら考えない所に注目できたのではないだろうか。（「切っていないのに見えているのか？」）
- 不思議から広げていく授業展開は、問題意識をもつことができておもしろい。
- 単元構成としておもしろいので、次はどう音読につながるかにとても興味をもてた。
- 「古文に入る！」「何が書いてあるか分からない」などの戸惑いやとっぎづらさを感じさせていないように思う。
- 現代語訳から古文に入るというのは、授業スタイルとしておもしろい。
- 音読の仕方工夫の場面で、手の動作を使ったり、絵や図で表現しているのが素晴らしい。
- 意見交換の場面で普段から日常的に付箋を利用している姿が見えてすごかった。
- 教師の動作化により、かぐや姫の大きさを具体的に感じさせていた。
- 「気になる言葉や文を探し出す」ことの例を示して分かりやすかった。
- 物語の空白部分を付箋でそれぞれまとめさせることで、読みの交流が進んでいた。
- 一人で想像する場面の設定が、グループで深める時間に生かされているように感じた。
- 理解（解釈）と表現（音読）が一体化している。
- △個人思考の時間で各自でサイドラインを引かせ、解釈まで考えさせる。その後グループで交流する中で絞り込んだ方が良かったのではないだろうか？
- △付箋に何も書くことができない生徒への支援はどうなっていたのだろうか？実際の現場では3分では、書けない生徒も多い。
- △活動が細かく設定されすぎていたのではないか。
- △「さめきのみやつこ」名前については、生徒に注目させたい言葉なので、生徒自身に考えさせても良かったのではないか。
- △学習課題とは別に学習方法まで提示され、二つとも「めあて」ようになっていたのでは？
- △目標設定の時間で、どの程度の問題意識をもっていったか疑問である。（目標の具体化が必要だったのではないだろうか。）
- △現代語訳の内容が音読に生かしきれていない部分があった。
- △想像を広げたことが音読につながっていただろうか？文節や読点に着目しているように感じた。（できているグループを取り上げて良かったのでは？）
- △音読については、小学校段階で学習していることを活用させてもよかったのではないだろうか。
- △音読記号などの活用は？
- △場面や様子を捉えることと音読とのつながりが今一つ明確ではなかった気がする。
- △3点絞った部分の工夫と練習をさせてから次に進むとよかったのではないか。

### グループB

- 学習目標や学習内容がきちんと提示され、学習の流れが明確であった。
- 「子どもを授かったと喜んだ翁」について考える際に「正解はない」とフォローすることで、自由な考えを出しても良いという雰囲気が出た。

- 活動時間は1分・3分と明確に示すのはとても良かった。
- 興味を引かれた部分に線を引く活動は、自分の意見を書くことを苦手とする生徒にとっては、とてもよい活動であった。
- 自分で考え、それをペアに伝え、その後グループに伝えるというのは良い。また、付箋を用いることで自分の考えがはっきりする。
- 理由を書くという自己決定の場が設けられていることが良かった。しかも無言で取り組んでいた。
- 教科書を使わなかったことで発想が自由だったと思う。
- 「三寸ばかりなる人」で具体的に人形で示したり、赤ちゃんを抱っこするイメージと比較させたりすることで、気持ちや場面を考えやすくなった。
- 付箋に解釈を書き込む際に、様々な視点から書き込めていた。
- 各班で音読の工夫を考える時に、文章のような大きな範囲ではなく、文や部分のように小さい範囲にまで工夫の仕方を意見交換して良かった。
- 現代語訳の音読を工夫する際、単語レベルで自分たちのイメージを戦わせながら話し合うことができていた。「考えるだけでなく、読んでみることも大事」という声かけはとても良かった。
- イメージがつかめていたので、音読の工夫の話し合いが活発であった。
- 発表者の顔を見るとという学業指導がきちんとなされていた。
- △題材の示し方、学習目標の設定が必然的であると良いと感じた。
- △わくわくするような目的意識・学習課題が欲しい。導入はさらに劇的でもよいので？
- △小学校で学習したことの確認をしてから、中学校の学習に入ると、より発展的ではないだろうか。
- △単元で「付きたい力は？」そのために本時の学習を通して生徒をどんな姿に？評価はどこと？
- △学習目標にある「世界」とは？何だろうか。
- △物語の内容をおさえた中学生としての音読？の意味がよくわからなかった。
- △自分の考えた内容（活動）がいかされるような音読の仕方を考える場面設定が必要。話し合いの視点が明確ではなかった。
- △音読の工夫を考える時間に、さらに詳しい現代語訳を考える班もあった。不思議→交流→話し合い→訳を考えるになってしまっている。また、机上の整理も必要である。
- △5人班は声が聞き取りづらい。3～4人の班が良いのでは？
- △グループで話し合う必要性はあるのか？個人との効果の違いは何だろうか。
- △付箋に書いたことの発表があったが、それをもとにした深まりが少ない。
- △付箋に解釈を書き込む際に、「疑問」「情景」「気持ち」など視点ごとに色分けしたりすると視覚的にも分かりやすく、より効果的だったと思う。
- △線を引いた部分について、解釈というより疑問ばかり書いてあるのが目立った。

## グループC

- 中学校＝「内容を考えた音読」この目標はとてもいいと感じた。
- 付箋の使用は、中学生にとって考えを出しやすいし、まとめやすいので効果的である。
- 竹取物語を知ってはいても、きちんと最後まで読んだことがあるかを確認したことで、内容がよく分かっていないことの自負、確認ができて良かった。
- 音読の仕方を考える→音読をする→評価する→修正するという一連の流れはとても良い。
- 音読をする前にイメージを広げることは、音読をするにあたって重要だと感じた。

○音読の工夫の場面で、「三寸ばかり」をゆっくり弱く読むなど、明確な工夫点を出せていた。プレス記号なども入れられていた。

○言葉に着目した解釈というのは、とても良かった。

○生徒から「小ささが怖い」という言葉が引き出された後、でも翁は喜んだとつながり、生徒の発想は豊かに広がった。

○傍線は3カ所という指定だったが、まんべんなく引かれていて良かった。

△単元を貫く言語活動は？ゴールは何か分かりづかった。

△古典との出会いはサプライズ感が欲しい。

△現代文を見せることの良い点は？

△古典は「難しい」「分からない」を「おもしろい」にもっていけないか。

△題のない冒頭部分から話を推測させるのもいいかもしれない。

△グループで考えを出すのはいいが、それをまとめたり、決めたりする必要はあったのか？

△話し合いのイニシアチブは誰がとるのか？

△現代語訳で読みの工夫を考えさせればよかったのではないか。

△生徒から「さぬきのみやつこ」が不思議だという声があがった時に「名前だから、不思議と言われても・・・」という教師のコメントがあった。それはどうだろうか。

△「なぜ翁は喜んだか」を考える場面で、「おばあさんは病気をして、子供が産めなくて・・・」と生徒は言ったが、それは許容されるのか？

△付箋に書くべきことが分からない生徒は、話し合いが始まってから記入していた。手立てが必要ではないだろうか。何を付箋に書くのかを板書に残した方がいいのでは？また、縦書きと横書きの統一もして欲しいと感じた。

△小学校時代の音読の力（差が出てしまっている）をどう埋めるのか。「暗唱できる」→「スラスラ音読できる」→「歴史的仮名遣いでつまづく」とレベルが様々であった。

△古典の独特なリズムに対する意識付けが弱いのではないだろうか。

△最初に一度は古典の読みを確認してもよいのでは？古典を読めているのか評価しなくてもいいのか？